

■ 濱口重國 東洋史学者。昭和時代の光と影を生き抜き、中国史の基礎研究に多大の功績を残した。
はまぐちしげくに
田中正造直訴1901＝ 高知県香美郡夜須町の徳川政権時代に代々手縊港の船奉行を務めた家柄で、警察官僚の子に生まれた。
父の転任に伴って、金沢・広島と移り住み、

日露戦争終 1905＝ 4歳： 宇品港で<日露戦争>に出征・凱旋する兵士を眺め、勝利した時の提灯行列を記憶に留める。
以後、岡山・福山・福岡と転校を重ねる。

韓国併合 1910＝ 9歳：

明治天皇没 1912＝ 11歳： 明治天皇死去に際しての乃木將軍夫妻の殉死に強い衝撃を受ける。

第一次大戦始 1914＝ 13歳： 長野県松本の開智学校を卒業して、松本中学入学、
程なく金沢二中に転校、日本に入って間もないスキーを買って貰って遊ぶなどして、危うく落第しかける一方、眼疾に悩まされ、精神安定のため永平寺に参禅するなどした後、

ㇿ 明治条約 1919＝ 18歳：
原敬首相暗殺 1921＝ 20歳： 家系や年の離れた異母兄の影響もあって、
水平社結成 1922＝ 21歳： 第三高等学校理科甲類に入学、造船工学を志すものの、視力の点で製図が不可能と断念、
再度入試を受け直して文科乙類に入学。
京都に住み、永平寺への参禅も続けて、仏教や東洋文化への傾倒を深め、仏教青年会を再興して講演旅行をしたり、支那学会を組織して京都帝大の学者を招き、内藤湖南や河上肇の講演を聞くなど、多方面に活動
円本時代始 1926＝ 25歳： 上京して、東京帝国大学文学部東洋史学科に入学、
池内宏の明快な考証手法に魅せられ、藤田豊八の指導のもと唐代制度史を研究、
共産党事件 1928＝ 27歳：
世界恐慌 1929＝ 28歳： 卒業した。父が死去して生計の自立が求められるなか、
海軍軍縮条約 1930＝ 29歳： *卒論「府兵制度から新兵制」が{史学雑誌}に掲載・評価される。文科を新設した東北学院講師に赴任。
満州事変 1931＝ 30歳：
以後も手堅い論文を次々と発表して、

日中戦争始 1937＝ 36歳： 東方文化学院東京研究所所員として東京に呼び戻された。
研究所の仁井田陞らと切磋琢磨する一方、
第二次大戦始 1939＝ 38歳： この年刊行された秋沢修二「支那社会構成」に共感するとともに、これを批判することを課題とする。

日米開戦 1941＝ 40歳： *東京帝国大学助教授に就任し、研究者としての声価も確立するが、

創価学会換学 1943＝ 42歳： 私生活の破局が教官間の不和へと波及したため、辞職。学界との絶縁を企図して、
年金+総武装 1944＝ 43歳： 再婚後、満鉄調査局囑託として単身赴任、
敗戦 1945＝ 44歳： 大連で現地徴兵された直後に<敗戦>を迎え、進駐してきたソ連軍に能力を買われて日本人側委員となり、
居留民保護に尽力して感謝されるも、中間搾取していた満鉄幹部や中国人ブローカーから怨まれる。

新憲法公布 1946＝ 45歳：
ソ連軍が中国政府に権限を委譲して任務を解かれ、かつての満鉄調査部が中国に接收移管された{長春鉄路局科学研究所}で研究生生活に入るものの、怨んでいた者の誣告によって"人民裁判"にかけられ、失職して立ち売りで命をつなぐうち、真相が分かって突然放免され、民主組合の求めで数回講演をした後、
新憲法施行 1947＝ 46歳： 栄養失調の身で帰国、家族が疎閑していた静岡に至り、県庁囑託として引揚者業務を分担、生活に苦闘。
こうしたなか、東北の曾我部から学界復帰を勧められ、背水の陣で壮絶な苦闘を経て、
朝鮮戦争始 1950＝ 49歳： *論文「魏晉南北朝時代の部曲と衣食客の研究」を完成、東北大学から文学博士を授与され、新制大学として
発足した山梨大学学芸部教授に迎えられ、ようやく貧苦の窮状を脱した。

独立回復 1951＝ 50歳：
55年体制始 1955＝ 54歳：
基本的蔵書を有する研究室を構築するとともに、学際的研究の場を組織することに心血を注ぐ一方、地方大学として比率の多かった女子学生のなかに、優れた人材を発見して驚くとともに、卒論を指導し、前例の無い大学紀要への掲載を思い立ち、若干手を加えて共著の形で発表、
なべ底不況 1957＝ 56歳： 学芸学部長に就任し、
安保闘争 1960＝ 59歳： 退任する間も、優れた学生との切磋琢磨という形で研究を続け、
全国総合計画 1962＝ 61歳： 「唐法上の賤民の基礎的研究」が成って、京都大学から法学博士を授与され、

東京初レヅ 1964＝ 63歳：

いざなぎ景気 1966＝ 65歳： *退官。戦前の研究をまとめた「秦漢隋唐史の研究」が出版される。「唐王朝の賤人制度」で、

霞ヶ関レヅ 1968＝ 67歳： 日本学士院賞を受賞するに至るものの、授賞式に出席できないほど体力が衰え、
以後、療養生活を送りながら、口述・推敲に努力を続けたが、

石油ショック 1973＝ 72歳：

・・・・・・ 1981＝ 80歳： 肺性心で没した。